

不登校生徒支援事例について

不登校生徒の状況

本校は全校生徒 225 名であるが、30 日以上欠席している不登校生徒が 31 名いた。その中には、起立性調節障害と診断される者、個別に日本語の指導が必要な生徒などが含まれている。また江東区の教育支援センターに週一回程度通学する生徒もいる。学級担任が主となって電話連絡で登校を促してはいるが、当該生徒達は登校することに価値を見いだしていないことがある。登校のきっかけとなる校内における別室指導について当該生徒たちに周知し、一人一人に応じた支援を充実させることが課題と捉えている。

具体的な取組

(1) 不登校生徒支援体制の見直し
週に一回生活指導部会を開催している。その会の構成員は生活指導部に属している教員が主であったが、不登校対策の側面があるため、SC や SSW にも参加してもらい生徒の支援体制を強化した。

(2) 関係機関の活用（その1）
SC と SSW に不登校の実態を伝えたことで、親子面談や登校支援などの協力体制が確立した。親子面談は夏休みに行われた担任との三者面談から、SC との面談につなげることができた。

(3) 外部機関の活用（その2）
学級担任と SC との連携を密にする環境を整えた。不登校生徒が登校できたときは SC との交流を促している。ソーシャルスキルを養うゲーム等を用いながら、生徒同士が関わり合える活動を設定し、和やかな雰囲気的环境を整備している。

(4) 別室学習支援教室の運営
「陽だまりルーム」という名称の別室に支援員が常駐して学習支援や相談対応を行っている。時には SC や SSW も入室して来室した生徒と会話する等、生徒にとって安心できる環境づくりをしている。



成果

別室学習支援教室の存在を三者面談、前後期のつなぎ目で家庭に広く周知したことで来室する生徒が常時 3 名いて、SC や SSW の活躍で週に 1 日登校できるようになった生徒が 3 名に増えた。

課題

関係機関等に繋がっていない生徒が数人いる。その生徒へのアプローチが大きな課題である。

「すまいるルーム」での別室指導について

不登校児童・生徒の状況

- ・各学年に数名、不登校児童が在籍している。
- ・不登校の要因は様々であるが、明確な理由がある場合だけでなく、自分ではうまく説明できない漠然とした不安を抱えている児童がいる。
- ・不登校児童の多くが、本来なら学級で楽しく生活したいという思いがある。

具体的な取組

【環境の工夫】

- 児童が安心して前向きな気持ちで過ごせるように、室内の掲示物や色合いを明るいものにしている。
- 別室の参加児童みんなですごせる場や、個別で過ごせる場などを設け、各児童の実態に合わせて学校生活を送れるようにしている。

【学習を継続する工夫】

- パーテーションで仕切られた学習スペースで、別室からオンライン授業を受けられるようにしている。
- 別室に登校している児童一人一人の学習進度に合った時間割を掲示し、スモールステップで毎日達成感を得られるようにしている。

【保護者との連携の工夫】

- 「学習の記録」というファイルをつくり、別室での学習の状況や持ち物などを毎日連絡している。
- 管理職、学級担任、養護教諭、別室指導支援員等が綿密に情報共有し、登校に不安を感じている保護者に働きかける。

【校内体制の強化】

- 別室での支援内容を含め、不登校対策委員会で具体的な取組を提案し、組織的・継続的に実践している。



成果

- 登校に不安を感じている児童が、別室なら安心して登校できるようになり、継続して登校し、学習に取り組めるようになった。
- 不登校による学習停滞の不安について、解消できるように個別指導を充実させることができた。

課題

- 別室指導支援員と、不登校担当者や担任との情報共有が滞ることがあるため、連絡方法を精選していくことが課題である。

別室指導支援員との連携について

不登校児童・生徒の状況

対象児童は、小学校3年生であり、2年生の途中から不登校状態が継続している。不登校の要因は、学校や友達への不安感が大きい。Meet を使って教室から配信されるオンライン授業の様子を見ている。学習を行いつつ、時間を決めて自分のやりたいことを行うなど、別室指導員と一日の過ごし方を相談しながら決めている。

具体的な取組

その日の学習内容やクラスでの活動を分かるように、クラスルームに1日の簡単な学習内容を担任から送り、本人と校内別室指導支援員が把握できるようにした。また、対象児童が登校している間は、常に Meet をつないで授業の様子や活動が分かるようにした。

対象児童の今後の取り組みや方向性について、SC の児童観察や保護者面談を基に副校長、担任、校内別室指導支援員、SSW と情報共有を行うようにした。児童が登校している時間は打ち合わせができないので、放課後に時間を合わせて実施した。

教室の時間割や学習内容を共有して、どんな学習をしているのか、活動をすればいいのか把握した中で、自分のできることを校内別室指導支援員と相談して取り組んだり、時間を決めたりした。また、学習が終わった後、自分の好きなけん玉やタイピング練習などにも取り組めるようにした。

対象児童が登校した後、どのように過ごしているのか担任が把握できるように「学習室の記録」用紙を作成し、校内別室指導支援員が記録を残すようにしている。対象児童の学習や活動内容だけでなく、支援員とのやり取りや児童の様子も記録している。



成果

対象児童が登校した後、担任だけでは十分に対応できないが、校内別室指導支援員がいることで登校から下校まで個別に対応することが可能となり、児童の登校日数増加につながった。

課題

校内別室指導支援員と他の教員が打ち合わせや情報共有する時間をつくるのが課題である。

不登校生徒別室指導について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒は、中学校3年生であり、1年時の中頃より不登校状態が継続している。不登校の要因は、当該生徒が1年時の夏休みに「新型コロナウイルス感染症」に罹患して、それ以降学校に来づらくなってしまったことであると考え。今年度6月より週1回程度、別室登校を行っている。

具体的な取組

○ 図書室での別室指導

3年時の6月より、図書室で別室指導を開始した。週に1回保護者と登校し、SCによるカウンセリングを行った後、支援員と一緒に学習を行っている。



○ 生徒に応じた支援方法①

当該生徒は2年時には在籍学級に復帰したものの、友人関係等の不安から夏休みぐらいいから登校できなくなった。

人間関係に対する不安感だけでなく学習面についても不安感があるため、現在は別室での個別の学習を積み重ねながら自己肯定感の向上を図っている。

○ 生活指導部会での情報共有

毎週1回定期的に部会を開催している。校長・副校長も出席し教育相談コーディネーター（養護教諭）を中心に、スクールソーシャルワーカーも加わり、不登校生徒の情報交換を通して、支援方法や支援方針についての話し合いを行い、組織的な対応を心掛けている。

○ 生徒に応じた支援方法②

当該生徒とは別の生徒（中学校1年生）は、別室に登校し、その日の状況に応じて別室での個別学習を行うか教室での授業に参加するか、支援員と相談しながら決めている。教室に入る前のワンステップとして別室を利用しており、今後も生徒の思いを大切にした支援を継続する。

成果

定期的（週1回）に登校できるようになり、当該生徒は、卒業後の進路についても意識するようになった。学習意欲も高まってきている。生徒一人一人にとって教室以外の居場所を整備できたことで、不登校傾向のある生徒にとって登校しやすくなった。

課題

卒業に向けて、当該生徒と相談しながら、在籍学級との関係作りをすることが課題である。

地域の方々と連携した校内別室指導について

不登校児童・生徒の状況

本校における不登校生徒の要因は、多くが「不安の傾向」であり、次いで「無気力の傾向」となっている。また、「不安の傾向」が要因とするのは第3学年の生徒に多く、進路(受験)への不安との関係が強いと考えられる。また、第2学年では「不安の傾向」と「無気力の傾向」の差は生じていない。第1学年の不登校生徒は極めて少ない状況である。

具体的な取組

【生徒をよく知る方が支援員】

本校の「地域学校協働本部事業」に携わる「支援の会」の方が校内別室指導支援員として配置されており、本校生徒の特徴や傾向を考慮した支援を展開されている。

「図書室開放」「土曜数学教室」等で顔なじみの方が支援員であることから、安心できる環境を提供できている。

【人生のあり方を教える支援員】

本校に配置されている支援員は、長年に渡り企業等で活躍されてきた方であり、定年退職を機に多くの人と関わってきたことで得た経験を生徒のために還元してくださっている。

「何のため」を根本に置き、学ぶことの大切さを伝えた上で、自分の人生について考えることを伝えている。

【自分探しをしてくれる支援員】

本校に配置されている支援員は、「支援の会」の取組として、第3学年の生徒に対し面接練習をしてくださっており、そのテーマが「面接は自分探し」というものである。

そのため、校内別室指導に通う生徒とも会話を重視し、当該生徒の“自分探し”のお手伝いをしてくださっている。

【教育相談委員会との連携を強化】

本校では「教育相談委員会」に校内別室指導支援員も参加していただいている。そのことにより、円滑且つ正確に不登校生徒の情報共有が図られ、通室生徒の状況確認と今後の通室予定生徒に関する支援方法の検討を円滑に行うことができている。



成果

本校は校内別室指導の対象となる生徒に対し、体験入室を導入している。体験入室後の通室率は100%であり、今後も校内別室指導に対する壁を低くする取組を検討している。二次元コードからアクセスできる紹介動画を作成し、不登校生徒や不登校傾向にある生徒に対して漏れなく案内することができてい

課題

本校の不登校生徒の52.9%は第3学年の生徒である。進路選択の大事な時期を迎えている生徒への支援については成果が低く、支援方法の再考が必要である。

生徒一人一人を大切にした支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、発達障害の傾向が見られる中学校 3 年生である。中学校 2 年生の時から不登校状態が継続している。不登校の要因として考えられることは、人間関係の構築が苦手であり、教室へ入ることに対して、不安な気持ちがあることが考えられるため、学習面に対する支援に加えて、コミュニケーションスキルの向上を図っている。

具体的な取組

①主体的な学習習慣の構築

学校に登校して、主体的に学習に取り組む事に重点を置き、教職員間で情報共有をし、日々の支援を実施した。初期の頃は会話を楽しみ、登校する習慣づくりを図りながら、会話の流れで気になったことを調べる学習につなげられるように言葉がけをしている。(登校日に雨が降っていたらなぜ雨が降るのかを調べてまとめるなど。)

③ニーズに応じた支援

生徒から「給食を食べたいが教室には行けない」という思いを聞き、別室指導支援員が別室で当該生徒と一緒に給食を食べている。コミュニケーションをとることで信頼関係の構築につながった。

②コミュニケーションスキルの向上

集団での活動に慣れるとともに、コミュニケーションスキルの向上を図るため、生徒の希望に応じて学年のちがう不登校生徒が、同じ教室で活動している。

基本となる活動内容は一人一人異なるが、集団での活動を行うこともある。



④生徒の変容

登校後一日の学習の流れを本人が決めている。得意な教科、好きな教科、興味のある学習内容だけでなく、自ら考えながら、苦手な教科や様々な活動に取り組んでいた。



成果

支援前は 1 週間に登校する日数が、特別支援教室とスクールカウンセラーの面談の 2 日間であった。今では別室を含め、週 4 日程度登校できるようになり、次回の予定や教えてもらいたいことなどを自主的に聞いてくるようになった。

課題

別室への登校が定着していない生徒もいるため、一人一人の生徒にとって安心できる場所となるよう、環境を整備する。

アセスメント・連携に重点を置いたチーム支援について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒は中学3年であり、中学1年の時から不登校傾向が継続している。要因は、小学校の時に生じた家庭環境の変化であると考えられる。当該生徒は家族に対する不安感が強く、外出ができない状況であったが、教育支援センターには通室することができている。

具体的な取組

組織的な対応の充実

不登校担当教諭を中心とした、ケース会議を実施し、当該生徒に対するアセスメントを行った。

チーム支援の必要性と方向性を確認し、週1回の校内委員会で生徒の状況や変化を共有することで、生徒との関わり方において、不登校担当教諭や学年教諭、養護教諭等が連携した対応ができるように共通理解を図った。

教育支援センターとの連携

当該生徒に教育支援センターに通い学習を進めたいという気持ちが芽生えたため、別室登校について提案をしたところ、登校への意欲を見せるようになった。別室登校に向けて面接を行い、生徒のニーズを確認しながら別室での支援を開始することができた。

スクールカウンセラーとの連携

当該生徒は自分が登校及び外出中に母親がいなくなるのではないかと不安を抱えているため、スクールカウンセラーによる相談を継続的に行えるようにし、当該生徒の心理面での安定を支援している。



成果

当該生徒にとって学校との結びつきが途切れることなく、校内に居場所があるということは、効果的な支援となっている。これまで登校することが困難であったが、別室を整備したことで月に1回以上継続して登校することができるようになった。

課題

生徒が緊張することなく、校内の別室に登校するための教室配置等、環境を整備することが課題である。

別室指導支援員を活用した支援の充実について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学校 2 年生であり、1 年次の 1 月にインフルエンザに罹患後、体調不良での欠席が増えた。進級後は、新しい環境への不安もあって、不登校状態が継続するようになった。不登校の主たる要因は、体調への強い不安である。校内別室指導支援員の配置を受けて、6 月中旬より別室登校を開始した。

具体的な取組

○校内支援委員会によるアセスメント
毎週、木曜日の時間割に位置付けて、定例の校内支援委員会を開催している。教員以外にも、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが出席し、配慮が必要な生徒の情報共有を図りながら、様々な視点から支援の方向性や具体的な手だてを検討している。

○別室登校に関する校内ガイドライン
別室指導支援員の配置に先立ち、校内における別室登校のガイドラインを策定し、共通理解を図った上で支援を開始した。別室指導支援員の役割と、対象生徒の担任や学年教員との連携の取り方などをあらかじめ整理することで、組織的な対応を推進した。

○生徒の実態に合わせた支援・見守り
第一に、登校できたことを、関われる大人全員で受け止め、認める。その上で本人の状態や主体性を尊重して、できることや、やってみたいことを引き出しながら支援するように努めている。



○切れ目のない適切な支援を目指して
勤務曜日が異なる 2 名の校内別室指導支援員が密に情報共有を図りながら、生徒にとって切れ目のない適切な支援を行えるように、「引継ぎノート」を作成・活用している。また、引継ぎノートを通して、教員側も支援の詳細や生徒の状況を、具体的に把握することができる。

成果

校内での居場所と支援体制が確立されたことによって、登校できるようになった生徒が増えただけでなく、早退せずに下校時刻まで過ごせるようになった生徒もいる。6 月中旬から夏季休業前までの約 1 か月で、延べ 64 名の生徒が別室登校を行った。

課題

幸いにも熱意と豊かな人間性のある方を支援員として採用できたが、優秀な人材を継続的に確保することが課題である。

安心できる、校内別室での支援について

不登校児童・生徒の状

当該生徒は中学校 2 年生で小学校までは登校していたが、中学に進学した後、人間関係に関する悩みから、欠席が多くなり、今年度に入り不登校傾向となった。本人と保護者は、集団生活に対する苦手意識のため学校生活全体に対する抵抗感がある。また、不登校による学力低下への不安も感じている。

具体的な取組

○校内別室における支援体制の整備
相談室を利用した別室登校生徒の受け入れについて教職員で共通理解を図り、校内別室指導支援員を配置した。

○学習支援と学校図書館の利用
時間の空いている教科担任が別室へ来て、自習学習や課題をサポートする。支援員が付添って図書室へ移動し読書や調べ学習などを一緒に行う。

○オンライン授業の配信
学習者用端末を利用して授業をオンライン配信し、自宅や保健室、別室登校時でも視聴できるようにしている。チャット機能により視聴だけでなく授業へ参観することができる。

○校内別室における支援について
別室登校してきた生徒が、校内の落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習・生活できるよう支援する。ワーク等の自習学習の見守りや、ちょっとした会話などでリラックスできるような雰囲気づくり、給食を一緒に喫食するなど生徒が安心して登校できるようサポートしている。



成果

週 1 日のみの来室だが、同じ日に来室している他生徒とオンライン授業を視聴し、給食時間を一緒に過ごすことができるようになった。実技科目の課題に対し、意欲的に取り組み、部活動の見学を顧問の教員と相談するなど、学校生活に前向きな気持ちになってきたと感じる。

課題

来年度の最終学年に向けて学習面での遅れを取り戻すことや、教室に戻りたい気持ちはあるがあと一步踏み出せずにいる様子に対してどう支援していくかが課題である。

生徒が選ぶ特色ある支援について

不登校児童・生徒の状

登校しても、教室にはなかなか入れない生徒、教室に入ることは苦痛ではないが、教科によっては教室での授業に参加できない生徒、その日の体調によっては、教室で授業を受けることができる時とできない時がある生徒、様々な理由で教室に入れられない生徒がいるため、一人一人の思いに応じた支援を行っている。

具体的な取組

○学習の支援

タブレット等を用いて、リモート授業に参加したり、持参した教科書やワークを用いて計画的に自習をしたりしている。

木曜日の支援は、本校に勤務した経験のある支援員が担当しており、分からない学習内容について支援している。

○ゲームを通してのコミュニケーション
特別支援教室の教具を借りて、四目並べや人生ゲームに取り組んでいる。

勉強の合間の息抜きとしてだけでなく、他の生徒とのコミュニケーションを深める活動となっている。

水曜日の支援はゲームやICTが得意な支援員が担当している。

○お話タイム

はじめは支援員との1対1の会話であったが、現在は学年を超えて小グループで会話をする等、かかわりあう場面を設定している。

金曜日は、本校に栄養士として勤務した経験のある支援員が担当し、食事や健康の話をすることもある。

○仲間と卓球

別室の授業で生徒が一番楽しみにしているのが卓球。皆で協力して卓球台を設置し、卓球に楽しみながら取り組むことで人間関係を構築している。

月・火曜日に担当する支援員は、体育大学の学生であり、楽しく体を動かしながら過ごしている。

成果

生徒が自分たちで時間割を決めて、充実した一日を過ごしている。また、ゲームや卓球等を通して、コミュニケーション能力も高めている。

課題

現在、特性のある4名の支援員がいる。しかし、今年度で2名の支援員が辞職となる。適材適所の支援員を探すことは難しい。



生徒が「選べる」不登校対策について

不登校児童・生徒の状況

- ① ブリッジスクールや本校別室指導に通う生徒が多く、前向きな生徒もいる。
- ② 保護者や生徒本人と連絡の取れない家庭はなく、担任が一人一人に対して定期的に連絡をしている。
- ③ 前期の登校日数が5日以内の生徒も4人いるが、本人と直接連絡が取れている。

具体的な取組

別室の設置（全体）

本校では別室を3種類設けている。あすなる、ウェルビー、放課後自習教室である。週5日、毎日別室があるように設定した。別室指導支援員は元PTA役員、地域ボランティア、OB、司書教諭、海外留学生が行っている。生徒のニーズに応じた登校方法ができるようにしている。

ウェルビー教室

ウェルビー教室は全校生徒を対象とした体験学習の場である。国際交流学习では、生徒は海外留学生と英語・日本語でコミュニケーションを図り、異文化を感じ取っている。また、地域の方々からの郷土遊び（かるたや独楽）、手芸、折り紙等を学ぶ文化体験も用意している。

放課後自習教室

放課後自習教室は、全校生徒を対象とした、図書室で静かに自習を行う場である。活動中には、本や新聞を読んだり、生徒間で教え合ったりしている。また、生徒達は、自習に加え、図書室の管理のお手伝いなど、公共心を養う活動を行う時もある。

あすなる教室

あすなる教室では各自の判断に任せた取組を行っている。自習をして学習の遅れを取り戻す生徒もいれば、生徒同士で会話を楽しみながら生徒間交流を図る生徒もいる。自分と向き合い、【好きなこと】を見つけられた生徒もいる。

成果

教育支援センターに通所している生徒や家庭でほとんどの時間を過ごしてきた生徒も別室に登校し、自主的に学習するようになった。別室の設置は不登校生徒の登校支援に大きく繋がっている。

課題

様々な生徒・大人とつながることで更に別室指導を充実させることができると考えられるため、支援員の人材確保が課題である。



連携した支援の充実について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、友達との関係性等が原因で、徐々に登校することができなくなった。その後、不登校となったため、教育支援センターへの通所を開始した。担任との面談等を繰り返す中で、別室に登校することを提案し、現在は、少しずつ別室登校を始めている。

具体的な取組

生徒支援委員会を中心に、校内別室指導支援員の運用について協議をし、学校全体で共通理解を図った。また、不登校生徒で別室登校を希望している生徒の在籍学年の教員等と連携を密にしながら、校内別室指導支援員への別室登校生徒の引き渡しや、別室での活動内容の確認等を丁寧に実施している。

校内別室指導支援員の主な支援内容は、別室での学習支援である。別室に登校している生徒一人一人の支援計画をもとに、個別に支援を実施している。オンライン授業、または自習課題がある場合には見守りながら学習支援に取り組んでいる。また、休み時間などは話し相手となって心のケアも行っている。

別室に登校する生徒が不在の場合や同日に複数の校内別室指導支援員が配置できる場合は、教室を巡回して生徒の様子を把握している。また、生徒支援委員会と連携を図りながら、支援のために教室に入り、個別に支援をしている。

別室支援員活動場	
日	B()
1	別室
2	
3	
4	
5	

校内別室指導支援員から特別支援コーディネーターや学級担任への報告手段として、直接報告ができない場合を考え、生徒が記入する「振り返りシート」や、校内別室指導支援員が記入する「報告書」ファイルを回覧して、スムーズな情報共有を図っている。



成果

- ・別室に登校している生徒の状況を細かく把握し、一人一人の様子等を報告してくれることで、より深い生徒理解につながっている。
- ・学習支援のために各教室に入り、支援の必要な生徒へ声をかけることで、別室登校生徒や不登校生徒を出さないための未然防止効果が見込まれる。

課題

校内別室指導支援員の効果的な活用について、他の実施校と情報を共有するなど、より効果的な実践を検討することが課題である。

連携を大切にした不登校傾向にある児童の対応について

不登校児童・生徒の状況

当該児童は、低学年と中学年の児童である。低学年の児童は不安傾向が強く、登校前になると心理的に不安定になり登校できない状況があった。中学年の児童は、生活リズムの乱れがあり、一度学校を欠席すると長期化する傾向がある。どちらの児童も別室であれば、登校できそうであるという意思があり、別室での支援を続けている。

具体的な取組

不登校支援担当を中心にした校内委員会にて、不登校の状況、概要、支援の方針について、検討、協議を行っている。校内委員会での協議内容は、全教職員へ共有データシステムで共有している。校内委員会にて SC の情報を共有し、SSW とは来校時に情報を共有するなど組織的な支援を行っている。

当該児童が登校した際に、不登校支援担当教員及び別室指導支援員が児童に対して、一日のスケジュール（別室及び在籍学級での学習、学習内容等）について確認し、支援する。学習、支援内容は、学校と家庭が連絡ノートで共有している。SC、SSW の来校日と重なる時は、面談及び行動観察をしてもらっている。

別室指導支援員は別室での支援だけでなく、別室を利用している児童が在籍学級で学習する時は対象児童の見守りを行っている。別室指導支援員も含めた学校組織全体ですべての児童に対する支援を充実させられるよう、管理職を中心に計画を作成している。



対象児童の保護者に対しては、SC 面談を定期的に受けていただいている。児童の状況、保護者の心理的な負担等も考慮し、ケースによっては、SC から、医療機関等のアウトリーチを進めてもらっている。

なお、別室指導支援員については、大学と連携をし、心理学専攻の大学院生を紹介いただいている。

成果

今年度、別室指導支援員による支援を行っている児童については、長期欠席傾向がある状態から、別室指導への登校を開始し、11月上旬の段階では在籍学級での学習を受けられる状態になるなど改善が見られる。別室指導支援員の配置により、児童がいつでも相談できる体制をとることができている。

課題

現在、別室指導支援員を任用することができ、児童への支援を充実させることができているが、別室指導支援員の継続的な人員確保が課題である。

「別室適応教室」（校内別室）の利用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、登校はできるものの、何らかの理由により学級等の教室に入ることが難しい生徒としている。具体的には、不登校の混乱期（初期）または、回復期の時期に該当する生徒であり、本人の状態の深刻さが比較的軽度である生徒が、別室適応教室（校内別室）を利用している。

具体的な取組

○「不登校支援委員会」及び「合理的配慮検討委員会」の活用

月1回の不登校支援委員会で、不登校の生徒のアセスメント及び支援方針の立案・確認、別室適応教室の利用が必要と思われる生徒については、週1回の合理的配慮検討委員会で、検討並びに判断する等、組織的な取組を行っている。

○校内別室指導利用までのプロセス

- ①生徒・保護者に概要説明
 - ②スクールカウンセラーとの三者面談
 - ③合理的配慮検討委員会で検討、判断
 - ④管理職面談で本人の意思確認、決定
 - ⑤担任・支援員と利用時間、方法の確認
- 以上のプロセスにより、組織的な運用を行っている。

○オンライン授業の活用

オンライン授業を選択する生徒については、当該生徒の学級の授業をビデオ通話アプリでつなぎ、別室適応教室で授業を受けている。2名の別室指導支援員が適宜コミュニケーションを図りながら、温かい雰囲気の中で支援を行っている。

○別室適応教室の環境整備の充実

集中できる環境が必要な生徒が安心して別室適応教室で学習できるように、パーティションを設置する等、環境整備を図っている。



成果

- 前年度、90日以上欠席があった生徒が、教員及び支援員の組織的な支援により、別室適応教室を利用しながら、ほぼ毎日登校できるようになった。
- 不登校の初期段階の生徒が、当室の利用で心の安定を図り、学級の教室に復帰することができた。

課題

- 別室適応教室の環境整備の更なる充実
- 利用生徒の継続的なアセスメント及び支援方針の検証に向けた組織の構築

「つながり」を大切にした校内別室指導における取組について

不登校児童・生徒の状況

別室指導の対象生徒は、不登校、あるいは、登校しても教室にずっといることが難しく、今まで保健室や相談室等の別室に登校していた生徒である。要因は、無気力や不安、家庭的な要因など様々であるが、別室利用者については、不安傾向にある生徒が多い。

具体的な取組

①別室登校という選択肢の提案

不登校や教室に入れない生徒の居場所として支援員が常駐する別室を設けたことについて、周知した。別室利用のルールを整え、利用希望の意思が確認できた生徒が別室を利用している。教室にずっといることが難しく、今まで保健室や相談室を利用していた生徒も別室の利用を始めている。

②教員や所属クラスとのつながり

給食を別室で食べる場合は、生徒の実態に応じて教員や所属クラスの生徒が途中まで持ってきたり、自分で受け取りに行ったり、クラスとの関係性が途切れないようにしている。休み時間にクラスの生徒が話をしに別室に来ることもある。教員とは、専用の連絡ノートも活用して、コミュニケーションの一助としている。

③チームで動く

支援員に加えて、担任や SC、学年の教員等も別室を巡回し、生徒の様子や学習状況の把握に努めている。週に一度、特別支援教育校内委員会で利用生徒の情報を確認し、全体でも共通理解を図っている。利用生徒も別室に置く図書の設定など一緒に教室作りをしている。

④柔軟な対応

利用時間や学習内容は生徒と担任が相談して決めている。教室で出席確認後、別室に移動する、午前中のみ利用する、1日2時間だけ利用するなど、生徒の希望を聞きながら活用している。



成果

別室利用者の中で、不登校になってからの欠席率が85%であったのが、今年度41%まで減少した生徒がいる。今まで欠席せざるを得なかった生徒にとって、学校の中に安心できる居場所があることで、登校につながったことが成果である。

課題

登校日数が少ない生徒に対して、別室登校に限らず、他機関とも連携して、安心できる学びの場を提供していくことが課題である。